

小学校音楽科導入期の音楽科教材に関する一考察

～ 幼保小接続の視点から ～

岩 佐 明 子・堀 内 詩 子

1. 問題の所在

平成 29 年度告示の学習指導要領の改訂がなされた。小学校音楽科（以下、音楽科）の改訂の要点として、音楽に対する感性を働かせ、他者と共同しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてその良さなどを見出したりすること、また、音や音楽と自分とのかかわりを築いていけるよう、生活や社会の中の音や音楽の働きについての意識を深める学習の充実を図ることが改訂のポイントとなった。音楽科の特質に応じた、物事をとらえる視点や考え方である「音楽的な見方・考え方」の育成をねらっていることが伺える。小学校での音楽の学びの土台として乳幼児期の音楽との関わりがあることは、子どもの成長を考える上で外せない要因であろう。子どもの視点に立つと、歌ったり楽器を奏でたりと生活の中に音楽が根付いている先に、小学校ではその活動が新たに教科として始まるのである。しかし、幼児期での音楽の関わりと小学校での音楽科の学びには大きく隔たりがあり連続性が見えにくいことが課題として指摘されている（今村・山内、2020）¹⁾。この見えにくい連続性について、具体的に見える形にしていくことは、意義があることと考える。

2. 研究の目的と方法

連続性を可視化するために本研究では、導入期における幼児期の音楽活動を見据えた教科教育の指導に生かすことを目的とし、幼児教育と小学校音楽教育との関連図を作成する。その方法として、音楽科の基準となる「学習指導要領」と幼児教育の基準となる「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（以下、「3 法令」という）を土台にそれぞれの関連を探ることから始め、分析から見えてきた幼児教育と小学校をつなぐ音楽的な要素キーワードをもとに、小学校の音楽科導入期の教材とつなげ、導入期の音楽教育について考えていく。

3. 学習指導要領と幼児教育との関連

平成 28 年 12 月 21 日、中央教育審議会答申において、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」が示された。学習指導要領改訂の方向性として、「社会に開かれた教育課程」の実現が掲げられ、「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」がその中に示された。「何ができるようになるか」の中にある「育成を目指す資質・能力」に着目すると、基本的な考え方として「育成を

目指す資質・能力に共通する要素を明らかにし、教育課程の中で計画的・体系的に育てていくことができるようにする必要がある。²⁾」とある。また、「資質・能力の3つの柱」として①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」とある³⁾。この答申の内容を基に、平成29年3月31日に改訂・告示された「小学校学習指導要領」、「中学校学習指導要領」、平成30年3月30日に改訂・告示された「高等学校学習指導要領」において、3つの柱に基づく資質・能力の育成を目指すことが明確化された。

幼児教育においても、平成29年3月31日に改訂・告示された3法令に、育みたい資質・能力の3つの柱として、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」が示された。更に、より具体的な「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が、(1) 健康な心と体、(2) 自立心、(3) 協同性、(4) 道徳性・規範意識の芽生え、(5) 社会生活との関わり、(6) 思考力の芽生え、(7) 自然との関わり・生命尊重、(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、(9) 言葉による伝え合い、(10) 豊かな感性と表現の10項目で示され、幼児期から高等学校修了までの期間に身につけるべき力に関わる観点が共通化された。

また、3法令では3つの柱を基に各学校段階間における円滑な接続を図ることが示された。幼児教育と小学校教育の接続に関しては、「育まれた資質・能力を踏まえ小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けること」、「幼

児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有し円滑な接続を図る」等、共通する文言が用いられた^{4) 5) 6)}。そして、「小学校学習指導要領」においても、「第2教育課程の編成4 学校段階等間の接続」において「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導・実施が求められている。

1) 幼児教育で音楽的な表現活動を展開する時の留意点

保育内容の領域は、相互に関連性を保ちながら達成に向かうものであることが前提となっている。しかし、領域「表現」に音楽に関する文言が多く見られることから、音楽的な活動を展開する時に中心となる分野であると考えられる。

また、領域「環境」の「3 内容の取扱い (4) ⁷⁾」では、具体的に国歌、唱歌、わらべうたや伝承あそび等が挙げられ音楽的な活動に関する記述が見られる。

岩佐、長井、木許 (2018) の研究では、領域「表現」と関連する周辺領域の条文を抽出し、領域「表現」は全ての領域と密接に関連していることや、領域「環境」、「言葉」において、観点が重複することが多く、これらが領域「表現」とより深く関わっていることが述べられている⁸⁾。

保育者は、保育内容の領域や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基に、その内容や幼児の発達段階を考慮し、各施設における指導計画に沿った楽曲の選択や、活動内容の検討を行っている。その教材として、市販されている様々な楽譜や、CD、WEB等の音源資料を用い、音楽的要素を取り入れたあそびをととした活動を展開している。3法令では、国歌以外に共通して用いる教材を指定していないため、ここでは幼児教育における音楽的な表現活動を展開す

る時の留意点に着目する。

3 法令の解説では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、保育者が留意すべき点として以下を挙げている。なお、各法令により施設名や対象となる子どもの総称等が異なるため、「幼稚園教育要領」の解説より引用する。

表1 「幼稚園教育要領解説⁹⁾」より保育者が留意すべき点より抜粋 (文部科学省、2018)

<p>実際の指導では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が到達すべき目標ではないことや個別に取り出されて指導されるものではないことに十分留意する必要がある。もとより、幼稚園教育は環境を通して行うものであり、とりわけ幼児の自発的な活動としての遊びを通して、一人一人の発達の特성에 応じて、これらの姿が育っていくものであり、全ての幼児に同じように見られるものではないことに留意する必要がある。</p> <p>また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は5歳児に突然見られるようになるものではないため、5歳児だけでなく、3歳児、4歳児の時期から、幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことに留意する必要がある。</p>
--

表1より、保育者は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を理解し保育を展開しなければならない。しかし、あくまでも到達すべき目標ではないことや全ての幼児がその姿に到達するものではないことが伺える。また、10項目に渡る「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、個別に取り出して扱うのではなく相互に関連づけることや、幼児の発達の特性に 応じることが重要であると読み取れた。更に、平成28年に報告された「幼児教育部会における審議の取りまとめ」の資料3において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目から、小学校音楽科と特に意識的につながりを求められる姿として「豊かな感性と表現」が示されていることが確認できた¹⁰⁾。

以上より、幼児教育に音楽的な活動を取り入れる際の留意点として、①保育者は幼児が自発

的に遊ぶことが出来る環境を整えること、②領域「表現」を中心に周辺領域との関連を意識した保育を展開すること、③「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から「豊かな感性と表現」を中心に他の項目との関連を意識することが確認できた。そして、幼児一人ひとりの発達の特性にふさわしい、音楽的な表現活動の要素を含めたあそびを考案し、保育を展開することが求められていると考える。

2) 小学校の音楽科における指導時の観点

小学校の音楽科教育は、「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる素質・能力の育成」という観点が挙げられるだろう。内容構成としては、A 表現領域の項目として「歌唱・器楽・音楽づくり」B 鑑賞領域の項目として「鑑賞」、そして共通事項で構成される。図1に示すように、領域な分野については、表現と鑑賞をそれぞれに関連させ、共通事項は全体に関わる内容¹¹⁾として設定されている(有本ら、2019)。具体的な内容として「音楽的な見方・考え方を働かせ」ることが、音楽科で培う力だといえる。この音楽的な見方や考え方は、音楽科特有の観点であり、学習指導要領(文部科学省、2018)では音楽に対する感性を働かせ、(中略)自己のイメージや感情、生活や文化などと関連づけることが明記されている¹²⁾。そのための段階的な学習として、学年の目標が挙げられる。例えば「知識」に関しては、「曲想と音楽の構造などとの関わりについて」1・2学年、3・4学年では、「気付く」となっており、5・6学年で「理解する」と学びを深める。「技能」については、1・2学年は「音楽表現を楽しむ」3・4学年、5・6学年では「表したい音楽表現をする」など、知識についても、表現についても、学年があがるにつれてより音楽との関わりを模索するような内容で構成されている。また、「学びに向か

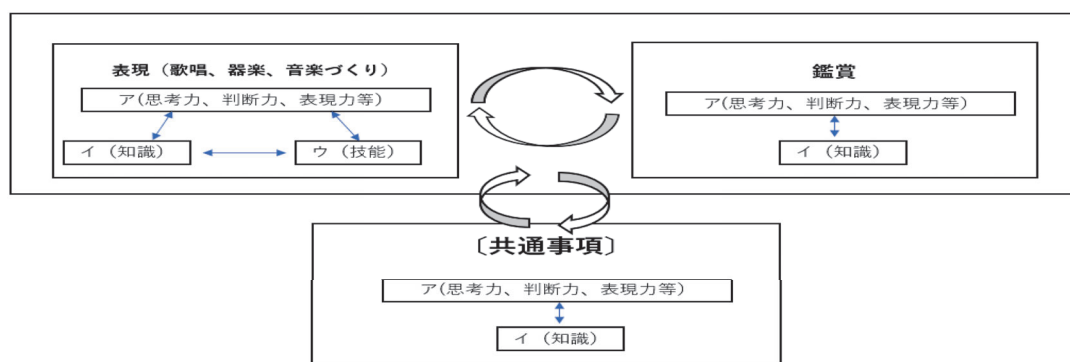


図1 領域・分野の指導内容の概念図 (有本ら, 2019)

う力、人間性」という観点が平成29年告示の学習指導要領から追加され、主体的に学ぼうとする力、自分らしい表現をもって生活を豊かにしていく態度がより鮮明に打ち出された流れとなっているのが、小学校音楽科教育における内容である。

4. 小学校の音楽科教材の分析

小学校の音楽科の指導内容は、「領域」（A 表現・B 鑑賞）と「共通事項」の枠組みで成り立っている。まず、「領域」の視点から第1学年と幼児教育で共通して扱われている可能性がある楽曲及び活動を検証する。次に、「共通事項」の視点から、第1学年及び第2学年で取り扱われている事項を基に幼児教育との接続を概観する。なお、音楽科の学習指導要領に記載されている各項目は、第1学年及び第2学年、第3学年及び第4学年、第5学年及び第6学年と2年ごとになっているため、「共通事項」については第1学年及び第2学年を取り上げた。導入期の分析対象は、教育芸術社の音楽科¹³⁾の教科用図書「小学生の音楽」（以下、教科書）とする。

4-1 第1学年と幼児教育で共通して扱われている可能性がある楽曲及び活動

前述のとおり、幼児教育の3法令では、領域「環境」に国歌、唱歌、わらべうたや伝承あそび等に親しむことや、領域「表現」に音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わうことが明記されている。しかし、小学校以降の教育とは異なり、共通する教材や音楽的な活動については、国歌以外に具体的に述べられてはおらず、保育者が各施設における指導計画や子どもの発達に沿った楽曲の選択や活動内容の検討を行っている。そのため、幼児教育で扱われている楽曲や音楽的な活動は流動的であるが、資料や先行研究から、幼児教育で扱われている可能性がある楽曲や活動と、第1学年の教材との共通点を探る。

小学校の第1学年において、教科書で教材として扱われている楽曲及び活動を掲載順に表2に示す。教材名は基本的には楽曲名となっているが、作詞者名、作曲者名が記載されていない教材は、楽曲名ではなく活動内容を示している。

幼児教育における歌唱教材については、全国大学音楽教育学会（2013）が、全国の保育者を対象に今後歌い継いでいく必要性を問うた調査を基に、検討され抽出された158曲¹⁴⁾と照らし合わせた。その結果、第1学年で取り扱って

表2 小学校第1学年音楽科の教材（小学生の音楽1. 教育芸術社、2020）

教材名	作詞者	作曲者	教材名	作詞者	作曲者
セブンスステップス	作詞者不明	アメリカの遊び歌	さがして みよう ならして みよう	安西 薫	長谷部匡俊
チェツェコリ	作詞者不明	ガーナの遊び歌	シンコペーテッド クロック		アンダソン
ひらいた ひらいた		わらべうた	きらきらぼし	武蔵悦子	フランス民謡
さんば	中川李枝子	久石 譲	ほしぞらの おんがく		
じゃんけんぽん	美能明子	橋本祥路	はる なつ あき ふゆ	三浦真理	三浦真理
なまえあそび			さんちゃんか	わらべうた	
フルーツランド			おおなみ こなみ	わらべうた	
みんなであそぼう	長井理佳	長谷部匡俊	おちゃらか はい	わらべうた	
しろくまの ジェンカ	平井多美子 日本語詞	ケン ウォール	あいあい	柏田裕美	宇野誠一郎
かたつむり	文部省唱歌		とんくるりん ばんくるりん	滝 紀子	川崎祥悦
ぶん ぶん ぶん	村野四郎 日本語詞	ボヘミア民謡	こいぬの マーチ	久野静夫	作曲者不明／黒沢吉徳
ことばでリズム			ラデツキー こうしんきょく		ヨハン シュトラウス（父）
う み	文部省唱歌 林 柳波	井上武士	たなばたさま	権藤はなよ 作詞／林 柳波 補作	下総暁一
おとを さがして あそぼう			おしょうがつ	東 くめ	滝 康太郎
みつばちハニーの ぼうけん		松田 昌	うれしい ひなまつり	サトウ ハチロー	河村光陽
たのしくふこう	鹿谷美緒子	鹿谷美緒子	おつかい ありさん	関根栄一	団伊玖磨
どんぐりさんの おうち	久野静夫	市川都志春	ちゅうりっぷ	近藤宮子	井上武士
どれみであいさつ	安西 薫	長谷部匡俊	ちょうちょう	作詞者不明	ドイツ民謡
なかよし	海野洋司	佐井孝彰	ぞうさん	まど・みちお	団伊玖磨
どれみふあその まねっこ			めだかの がっこう	茶木 茂	中田喜直
ひのまる	文部省唱歌 高野辰之	岡野貞一	ことりの うた	与田準一	芥川也寸志
やまびこごっこ	おうち やすひき	若月明人	こぶたぬきつねこ	山本直純	山本直純
まねっこあそび			こいのぼり	近藤宮子	絵本唱歌（無名著作物）
せりつこの まねっこ・おはなし			いぬのおまわりさん	さとう よしみ	大中 恩
こうしんきょく		チャイコフスキー	きみがよ	古歌	林 広守
おとさがし					

いる楽曲38曲中、16曲が一致した。表2では、一致した楽曲名を網掛けにして示す。幼児教育における器楽活動、音楽づくりの活動については、全国的な調査結果はなかったが、音楽づくりについては芹澤（2017）が2つの幼稚園で実施された事例を取り上げている¹⁵⁾。拍を刻みながら4拍子で子どもの名前を呼びかけ子どもが答える活動は、第1学年の教材「なまえあそび」と、身の回りの音を探す活動については教材「おとをさがしてあそぼう」と同様であり、幼児教育で取り上げる際の配慮点が記載されている。器楽活動については、入江（2020）が保育におけるリズム楽器について、静岡県内の幼児教育施設の保育者に質問紙調査を実施しており、子どもが扱うリズム楽器として使用頻度が高い順に、カスタネット、タンブリン、鈴、トライアングル、ウッドブロック、太太鼓、小太鼓、シンバル、その他¹⁶⁾を挙げている。第1学年の教材で扱われているリズム楽器を確認すると、カスタネットを扱う教材は「じゃんけんぽん」、タンブリンを扱う教材は「ぶんぶんぶ

ん」、トライアングル、鈴、タンブリンを扱う教材は「おとさがし」、ウッドブロック、トライアングルを扱う教材は「シンコペーテッドクロック」の順番に示されており、幼児教育で使用頻度が高い楽器を扱っていることが確認できた。

これらの楽曲や活動は全ての幼児教育施設で等しく扱われる訳では無い。しかし、小学校の音楽教科書では、幼児教育を受けた子どもに馴染みがある楽曲や活動を用いることで、小学校の入学当初の活動に円滑に接続し、更に発展させることが出来るように配慮されていることが推測される。

4-2. 共通事項

共通事項は、表現および鑑賞の学習において、共通に必要な資質、能力のことである。その内容は「音楽を特徴付けている要素」と「音楽の仕組み」の2つに分類されており、「音楽を特徴付けている要素」として音色、リズム、速度などの11項目が、「音楽の仕組み」として

表3 単元別の扱う共通事項（教育芸術社 小学生の音楽1,2,3より）

教科書名	出版社	1年生の単元	扱う共通事項	2年生の単元	扱う共通事項	3年生の単元	扱う共通事項
小学生の音楽	教育芸術社	うたっておどってなか よくなろう	旋律・拍・リズム	おんがくでつながらう	音色・拍・呼びかけと答え・リ ズム・強弱	音楽で心をつなげよう	リズム・拍
		はくをかんじとう	拍・音色・リズム・呼びかけと 答え・フレーズ	はくのみとまりをかん じとう	リズム・拍・旋律・	歌って音の高さをかん じとう	旋律・音階・音色・縦と横の関 係・拍
		はくのにってリズムを うとう	リズム・拍・フレーズ・音色・ 呼びかけと答え・反復	ドレミであそぼう	音色・旋律	リコーダーの響きを感じ 取ろう	音色・リズム・旋律
		みのまわりのおとにみ みをすまそう	音色・呼びかけと答え	せいかつの中にある音 をましよう	フレーズ・縦と横の関係・音の 重なり	拍にのってリズムをか んじとう	リズム・拍・旋律・反復・変化
		どれみとなかよくな う	音色・旋律・強弱・呼びかけと 答え	リズムをかかえて楽し もう	リズム・音の重なり・拍	せんりつのとくちよう をかんじとう	旋律・拍・フレーズ・強弱
		せんりつでよびかけあ おう	音色・旋律・強弱・呼びかけと 答え	くりかえしを見つめ よう	旋律・フレーズ・反復・リズ ム・拍	曲のかんじを生かそう	リズム・旋律・反復・変化・音 色
		がっきとなかよくな う	音色・リズム・拍	いろいろながっきの音 をさがそう	音色・リズム・呼びかけと答 え・音の重なり	いろいろながっきの音 をさがそう音のびき をかんじとう	音色・旋律・反復・音の重 なり・拍・強弱
		ようすをおもうかべ よう	音色・旋律・強弱・音の重 なり・呼びかけと答え・速度	ようすをおもうかべ よう	音色・リズム・旋律・反復・強 弱・速度	ちいさにつたわる音楽 でつながろう	音色・リズム・呼びかけと答 え・拍
		にほんのうたをたの しもう	旋律・拍・速度・	日本のうたでつなが う	旋律・拍・フレーズ・音の重 なり	音の重なりを感じて合 わせよう	旋律・強弱・音の重なり・反 復・フレーズ・音色
		みんなであわせてたの しもう	旋律・強弱・呼びかけと答え・ 音色・リズム・音の重なり・拍	みんなであわせて楽し もう	旋律・音の重なり・縦と横の関 係・音の重なり・呼びかけと答 え		

反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横の関係など4項目が挙げられる。共通事項の取り扱い、A 表現やB鑑賞の学習を通して行われるものであり、単独で扱われるものではなく、「音楽のしくみ」「音楽のもと」として提示されている。1～3学年の単元でどのような共通事項が扱われているのかまとめたものを表3に記す。

表3で示したように、音楽科ではひとつの単元や教材の中で複数の観点を同時に扱う。拍やリズム、強弱などの共通事項ひとつひとつに幼児期の生活や教育との関連を探っていくために、幼児期と小学校の学習のつながりについて分析をしていく。

1) 拍とリズム

前出の器楽教材「じゃんけんぽん」や鑑賞教材「さんぽ」で扱った拍感とその後に発展していくリズムに関する学習につながっていく概念である。

身体を用いた「拍」との関わりは非常に学びにとっても非常に有益な体験だといえる。矢部

(2011) は幼児の遊びの中に見られる音楽表現が共有されていく過程の中でも、身体的同調を伴う音楽的表現は何度も繰り返される中で拍說的・旋律的にまとめられ、音楽的コミュニケーションによる遊びが生み出されるとしている¹⁷⁾。その過程については、同研究では、「かーわってっ」「いいよ」のやり取りの発達的な変遷や、言葉遊びから始まる創作的な歌が生まれる過程において、身体的なやりとりと拍感が遊びの中で共有され、リズムへとつながっていることが明らかとなっている。つまり、幼児の遊びの場面で自然発生的に生じる「リズム」や「拍」の感覚は、身体表現とともに経験されることを通して、まとまり（フレーズ）という概念が生まれていると言えるのである。この身体からつながる「拍」の感覚は、リズム活動へと発展していく。今後2年生の学習「拍のまとまりを感じよう」では、2拍子の手遊びと3拍子の手遊びをしてから、鑑賞と身体表現と繋げることににより2拍子と3拍子を定着する学習活動の流れとなっている。その後、「リズムを重ねて楽しもう」の単元で、2拍子のリズム重ねと3拍子

のリズム重ねへと発展させている。2拍子と3拍子の拍感の違いについて時得・信谷(2010)は、リトミックの経験を小学校低学年の音楽科授業を組み立てた研究において、身体表現を取り入れることと児童の拍感の獲得について、研究を進めている¹⁸⁾。この研究が行われた平成20年3月告示の学習指導要領時では、身体表現が鑑賞の中にも組み入れられた変遷の時であり、また歌唱活動についても身体とのつながりが強調されている。身体を動かすことによって児童らがより想像力を働かせ、音楽と主体的にかかわることを促すための指導を目指していること、表現領域のみならず鑑賞の活動にも深くかかわっていることがあげられる。前述の単元に戻ると、まさに理解と遊びと繋げ、そして身体表現へとつながって、そして音楽活動に発展させていくというつながりをもっていることがわかる。

子どもの遊びから始まる幼児教育と概念として定着を図る学校教育とのアプローチの違いが浮き彫りになったが、幼児教育で概念ではなく、体験として子どもたちは拍感やリズムというものが身体に入っているともしえる。幼児教育の中で備わった生活から生まれる枠組みが少しゆるいフレーズ感や拍感を学校教育では「音楽」という枠組みの中で成立させる中で児童の主体性をはぐくむ活動へと発展していくねらいが考えられる。つまりフレーズのまとまりや拍感は、生活経験の中でおぼろげながら身についているものであり、それを構造の中に入れる、「しくみ」の中に入れていくということが、小学校の音楽活動で求められていることとなる。事実、前出の時得・信谷(2010)の研究において、身体を用いた学習はそれ以前の理解を促す形の学習方法に比べて児童の理解や参加の自己評価が高い結果が得られている。このことから、身体を使うということは、これまでの積み重ねと連動

した学習方法であることが挙げられる。

2) 反復

小学校の音楽科で初めて取り上げられる音楽のしくみは「よびかけとこたえ」と「はんぶん」である。「反復」は1年生では、入学時の教材で扱うにとどまっているが2年生では3つ単元で扱い、また3年生では4回の単元で扱うなど、その扱いは学年を追うごとに増えていっている共通事項である。本稿では、1年生から2年生にかけて共通事項として展開されている反復の学習について幼児教育までの体験と小学校教育の学びについて扱っていく。

そもそも反復は、自然な形で子どもたちに根付いている音楽遊びの一つである。しかしそれが仕組みに気がつくとなると、音楽という科目の特性上難しいものがあると考ええる。舞踊や文芸、絵画などを含めた芸術科における表現活動の中で、青山(1997)は音楽を「空間芸術」と「時間芸術」に分類した場合に、音楽は舞踊と同じく時間芸術であると説いている¹⁹⁾。ある一定の時間軸の中で発しては消えてしまうため、過去の時間とのつながりに気づき学ぶにつなげることはたやすいことではない。しかし、曲の構造としては音楽は多くの反復からできており、1曲の中で反復をすることでまとまりが生まれている。その音のつながりを発見できることは、楽曲を分析することにとどまるのではなく、音楽の構造に興味をもち、のちの音楽の創作活動につながっていくことになる。

教科書を素材に反復についての低学年における学習のながれを整理する。教育芸術社「小学生の音楽」において反復の学習が出てくるのは、「はくはくってリズムをうとう」の単元の「ことばでリズム」の教材である。言葉をリズムに置き換えて、同じ言葉を繰り返したり、違う言葉を組み合わせをする中でリズムの違いを楽し

む活動である。先にも述べたように時間芸術である舞踊と音楽の共通点がここにも浮かび上がる。つまり、あるフレーズのまとまりにおける同じ動きを繰り返すことによって、2小節単位のまとまりが固まりとして生じる。それが繰り返されることによってリズムのまとまりができるという曲の構造を言葉と共に身に着けていく。次に学習活動で出てくるのは、「繰り返しをみつけよう」の単元の「おまつりの音楽」鑑賞教材「トルコ行進曲」である。ここで旋律が繰り返される祭りばやしを作るということを通して、音楽の仕組みを理解し、「トルコ行進曲」を聴くことによる音の記憶と保持や1回目の時と2回目の時の変化を楽しむなどの活動が加わる。この後、「ようすをおもいうかげべよう」の単元で「たまごのからをつけたひなどりのバレエ」の鑑賞により、身体を動かしながら、曲の感じを味わいながら、全体として反復があることを感じ、身体表現につなげる活動へと発展している。

音楽の仕組みに関する内容は現場の教員からもどのように教えたらいいか戸惑いの声が多く聞かれる分野である。学習効果についても、どのように繋げたらいいかわからないというような疑問に立ち会うことも多い。斎藤ら(2011)は小学1年生から3年間、音楽の構造に関わる継続的なプロジェクト授業研究を進め、児童らが次第に「反復」「変化」について手ごたえをもち、創作活動に生かしていること、学習のめあてとして意識できるまでに音楽の構造が身についていくことで、創作できる領域も広がっていく学習成果が得られたことを報告している²⁰⁾。また、そのためには、知覚や感受を促す活動が不可欠であることも述べている。

このように学習として「反復」をとらえようとすると、消え行く音楽活動の中で難解さを感じるが、子どもたちの中で自然発生的に生じる音

楽遊びを紐解くと、「反復」がよく扱われていることがわかる。坪能・加藤(2017)は幼児のつくりうた^{注1)}の調査した研究において、音の高低や反復性について分析する中で、子どもたちが自発的に作ったつくりうた127曲のうち、反復があるのは74曲にのぼることを報告している²¹⁾。また同じフレーズを返すのではなく、多くの反復にはバリエーションを加えていることもあわせて報告している。この研究は幼児に日常生活の観察をベースにしている研究であり、子どもたちの音遊びの中に反復が日常的に行われ、またバリエーションを伴う発展した形になっている。また、黒石・梶川(2011)は乳児の子どもをあやす音楽も反復でできていると報告する²²⁾など、反復は音楽を形作る中で日常的に身近が素材であることが分かる。

5. 幼児教育における音楽的な活動と小学校音楽科の接続

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議(2010)において、幼保小接続に関する現状と課題が挙げられた。現状として「幼稚園・保育所・認定こども園の幼稚園・保育所・認定こども園の教育と小学校以降の教育には、様々な「違い」が存在(「遊びを通した総合的な教育」と「教科教育」など)。この「違い」は発達段階に応じた適切な教育を行う上で必要なもの。²³⁾」とまとめられている。課題として「一方、学校現場では、この「違い」によって、・小学校進学時にとまどう児童や、適応が難しい児童がみられる・両校種の「違い」が強く意識され、接続のための取り組みが進みにくい・幼児期の教育と小学校教育との接続関係がよく分からないとの指摘がある。²⁴⁾」と挙げられた。入学当初の子どもにとって、幼児教育と小学校教育の「違い」に

戸惑い適応が難しい状況や、保育者、教員ともに接続関係に理解が進んでいないことが確認できる。

幼児教育における音楽的な活動と小学校音楽科の接続の視点から、それぞれの指導法を具体的に検証する。幼保小接続の観点から、3学期制を導入している小学校の第1学年の1学期において、音楽科の教科書で扱う「歌唱」、「器楽」、「鑑賞」の各分野で最初に示されている1教材を取り上げる。特に、入学当初の子どもがこれらの教材に円滑に取り組むことを目標とした場合、幼児教育と小学校の音楽科の指導内容を、各教材の挿絵及び文言を基に考察する。

考察する項目は、①幼児教育で育成を目指す姿、②幼児教育で扱う時の留意点、③小学校音楽科で扱う時の留意点である。

1) 「歌唱」教材「うたってなかよし」の挿絵と文言

歌唱活動の教材「うたってなかよし」(pp.6-7)を取り上げる。題材名は「うたっておどってなかよくなるう」、学習目標は「みんなでいっしょにうたって、ともだちをつくりましょう」であり、教科書にこれらの文言が記載されている。楽曲名や歌詞は、教材と同じページには記載されておらず、楽曲名や歌詞の内容を表した挿絵が記載されている。また、「えの なかから うたをみつけて みんなで いっしょに うたいましょう」、「どんな うたがかくれているかな。」、「うたを しらない ともだちが いたら おしえて あげよう。」の文言がある。これらのことから、子どもたちが自由に話し合い、挿絵の中からイメージする楽曲を見つけて歌う教材であることが確認できる。挿絵からイメージ可能な楽曲は、「おつかい ありさん」、「チューリップ」、「ちょうちょう」、「ぞうさん」、「めだかのがっこう」、「ことりのうた」、「こぶたぬきつねこ」、「こい

のぼり」、「いぬのおまわりさん」等であり、子どもが入学前までに歌唱や歌あそび等で経験していることが想定される。

①幼児教育で育成を目指す姿

教材の文言から、子どもがこの教材に円滑に取り組むために、幼児教育で育成を目指す姿を考察する。教材に記載されている文言はカギ括弧で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の各項目は丸括弧の番号以下の文言で示す(以下、同様に記載する。)

文言の「うたっておどってなかよくなるう」、「みんなでいっしょにうたって、ともだちをつくりましょう」、「うたを しらない ともだちが いたら おしえて あげよう」は、友だちと声を合わせて歌い踊り、共に歌うことで友だちを作るように促し、更に歌を知らない友だちには教えてあげることを促しており、他者と音楽や言葉をとおして関わることから、(3)協同性、(9)言葉による伝え合い、(10)豊かな感性と表現の姿が発展したものである。「えの なかから うたをみつけて みんなで いっしょに うたいましょう」、「どんな うたがかくれているかな。」は、挿絵から歌を見つけ友だちと歌うことを促しており、歌をとおして他者と協同していく中で他者の考えに触れ、自分と異なる考えがあることに気付くことから、(3)協同性、(6)思考力の芽生え、(10)豊かな感性と表現の姿の姿が発展したものである。保育内容の領域では、領域「人間関係」、「言葉」、「表現」の内容を踏まえた保育が必要であると考え。入学当初の子どもが、挿絵と文言を基に小学校の教員が展開する指導を無理なく受け止めるためには、前述の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた上で、挿絵から楽曲名を想像できる力を身につけ、歌や踊りをとおして友だちをつくる経験、理解したことを友だちと共有する経

験をしておくことが望ましい。

②幼児教育で扱う時の留意点

本教材では、最初に挿絵から歌を見つける活動を設定しているため、幼児がこれらの楽曲を幼児教育において経験し、歌詞の内容をある程度理解していることを前提としているようである。そのため、保育者は歌唱活動のみに留まらず、挿絵から歌の内容をイメージする力の育成を目指す必要がある。具体的には、保育者の言葉がけやペーパーサート、絵本等の児童文化財を用いて歌詞の内容を幼児に伝えることや、幼児同士で話し合うことにより、楽曲名や歌詞の内容についての理解を深めていくことが必要である。また、歌唱をとおして友だちを作ったり、歌を教え合ったりする力の基礎として、集団での歌あそびの経験が必要なことや、幼児間で、積極的に関わりを持つよう促す言葉がけも必要であることがわかる。

③小学校音楽科で扱う時の留意点

本教材は、教科書に示される最初の教材であり、入学当初に扱われるため、特に子どもの発達や生育環境に違いがあることを前提とした指導が求められる。幼児教育では小学校以降の教育で指定される共通教材等が無い場合、取り扱う楽曲が施設によって異なる。本教材は、子どもが楽曲を知っていることを前提に指導を行うが、楽曲を知らない子どもに対して、範唱や音源を聴く活動や、周囲の子どもが歌う姿を見聞きする経験が必要であると考えられる。また、歌詞の理解が至らない子どもに対しては、歌詞の内容を詳細に説明することが必要である。

2) 「器楽」教材「じゃんけんぽん」

器楽活動の教材「じゃんけんぽん」(pp.14-15)を取り上げる。題材名は「はくをかんじとろう」、

学習目標は「[たん たん | たん (うん)] のリズムをうちましよう」であり、これらの文言とともに「はくによって、たのしくうたいましよう」、「うたにあわせて、□の ところでしたのリズムを(手の挿絵)や(カスタネットの挿絵)でうちましよう。」、「がっきをたいせつにしよう。」の文言がある。また、拍の図形、リズムを表している「たん」と書かれた図形、手を合わせた挿絵、カスタネットで打つ回数、演奏方法が挿絵で記載されている。本教材では、歌唱活動も同時に実施するがここでは器楽活動を取り上げる。使用楽曲は「じゃんけんぽん」、使用楽器はカスタネットであり、子どもが入学前までに楽器あそび等で経験していることが想定される。

①幼児教育で育成を目指す姿

本教材は後述する「B鑑賞」教材「さんぽ」直後の教材であり、「さんぽ」で示された手の挿絵と拍の図形に加え、リズムを示す「たん」と「うん」が言葉と図形で示されている。また、教科書に記載されている文言「はくをかんじとろう」「[たん たん | たん (うん)] のリズムをうちましよう」から、拍の図形の数の理解を促し、言葉と手拍子を一致させることを促していることから、(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚の姿が重要な要素である。また、「はくによって、たのしくうたいましよう」、「うたにあわせて、□の ところでしたのリズムを(手の挿絵)や(カスタネットの挿絵)でうちましよう。」では、拍によって楽しく歌うことを促し、歌に合わせてリズムを手やカスタネットで打つことを促していることから、(10) 豊かな感性と表現の姿が発展したものである。

「がっきをたいせつにしよう。」は、身の回りのものを大切にすることを促していることから、(4) 道徳性・規範意識の芽生えの姿を踏ま

えたものであることが分かる。また、保育内容の領域では、領域「人間関係」、「言葉」、「表現」の内容を踏まえた保育が必要であると考ええる。

これらのことから、入学前までに、拍にのって楽しく歌う、歌に合わせてリズムを手やカスタネットで打つ等の演奏の経験や、身の回りのものの扱い方について経験しておくことが望ましい。

②幼児教育で扱う時の留意点

3 法令では、拍とリズムについての記述は無く、楽器に関する記述のみ領域「表現」の「2 内容」に「(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」がある。このことから、楽器の演奏技術として拍やリズムを打つ技能や知識は問われておらず、活動の主目的は楽しさを味わうことであることに留意する必要がある。しかし、本教材に円滑な接続をするためには、拍に合わせて身体を動かす活動とリズムに合わせてカスタネットを演奏する活動を別々に扱い、身体感覚として、拍とリズムについて理解を進める必要がある。

③小学校音楽科で扱う時の留意点

本教材では、教科書で初めて楽器が登場する。幼児教育では楽器を使う「楽しさ」を主目的として扱っているが、小学校では「楽しさ」とともに教科書に示されている楽器の持ち方や打ち方等、楽器の取り扱いを、知識や技能として正確に伝えることが必要である。また、楽器の導入に関して、細田は C. オルフの理念に沿った提案として、幼児期は手拍子で正確なリズムを刻むことができてから楽器を導入することが必要であると述べており²⁵⁾、第1学年においてはその順序の指導がふさわしいと考える。本教材は、「小学校学習指導要領」の「第3 指導計

画の作成と内容の取り扱い 2 (8) ア 音楽を特徴付けている要素」から、「リズム」について初めて記述されたものである。「B 鑑賞」教材「さんぽ」で理解が深まった拍と、本教材で示されたリズムについて、関連づけて指導することで教育効果が高まると考える。具体的には、「さんぽ」を拍に合わせて歩きながら、本教材のリズム〔たん たん | たん (うん)〕を打つ活動を提案する。

3) 「鑑賞」教材「さんぽ」

鑑賞活動の教材「さんぽ」(pp.12-13)を取り上げる。題材名は「はくをかんじとろう」、学習目標は「おんがくにあわせてからだをうごかしましよう」であり、これらの文言とともに「おんがくにあわせて(手の挿絵)をうったりあるいたりしましよ。」、「おんがくにあわせて(手の挿絵)でうっていたのがはく(拍の図形)だよ。」、「拍(拍の図形)にあわせてあるけたかな。」の文言がある。使用楽曲「さんぽ」は、子どもが入学前に歌唱、身体を使ったあそび歌、楽器あそび等で経験していることが想定される。鑑賞教材であることを示す「きこう!」の文言、楽曲名、1 番の歌詞、歩いている子どもの挿絵が示されている。

①幼児教育で育成を目指す姿

教材の文言「おんがくにあわせてからだをうごかしましよう」、「おんがくにあわせて(手の挿絵)をうったりあるいたりしましよ。」は、音楽に合わせて手を打つ、歩くことや拍に合わせて身体を動かすことを促しており、(10)豊かな感性と表現の姿が発展したものである。また、「おんがくにあわせて(手の挿絵)でうっていたのがはく(拍の図形)だよ。」、「拍(拍の図形)にあわせてあるけたかな。」の文言、歌詞・手の挿絵・拍を示す図形が合わさった図

を用いて、歌詞では無く音楽に合わせて手で打っていたのが拍であることの理解を促していることから、(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、(9) 言葉による伝え合いの姿が発展されたものだと考える。保育内容の領域では、領域「環境」、「言葉」、「表現」の内容を踏まえた保育が必要である。

②幼児教育で扱う時の留意点

前述したとおり、3 法令では拍について取り扱っていないが、音楽を聴き自ら様々な表現をすることを楽しむことや、音楽に合わせて身体を動かすことを経験し、その心地よさを感じ取る経験を通して音楽的感性の育成が求められると考える。また、歌詞の文字、手の挿絵、拍の挿絵の数の一致を理解するには、領域「環境」の「2 内容 (9)、(10)」に示されている日常の中で数量や図形、文字に興味を持つように促す環境づくりや言葉がけが必要であると考えられる。

③小学校音楽科で扱う時の留意点

本教材は、「小学校学習指導要領」の「第3 指導計画の作成と内容の取り扱い 2 (8) ア 音楽を特徴付けている要素」から、「拍」について初めて記述されたものである。拍は、「中学校学習指導要領」でも示されている重要な要素である。小学校低学年の目標のキーワードである「楽しい」経験を基に理解を促したい。そのためには、鑑賞教材として音楽をよく聴き自由に動くことを促した上で、身体を音楽の拍とともに動かすことを教師が見本を見せ、その心地よさを十分に経験することが重要であると考ええる。

6. 小学校音楽科導入期の指導方法について

1) 新学習指導要領と 10 の姿との接続

入学当初の子どもが教材に円滑に取り組むために幼児教育で育成を目指す姿については、3 教材とも、音楽科と最も関わりがある (10) 豊かな感性と表現の姿を中心としながら、複数の項目の姿が関連していることが分かった。また、幼児教育及び小学校音楽科で同じ楽曲や活動を扱う場合の留意点を比較すると、差異があることが具体的に明らかになった。

これらの結果から、幼保小接続に関する提案を行う。現行の法令では、幼児教育、小学校教育ともに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共通に認識し、指導を実施することが前提である。しかし、法令の文言以外の具体的な留意点に関しては、保育者や小学校教師の個々の観点や、指導の経験から理解されているのではないだろうか。幼保小接続のために「幼稚園教育要領」には、「第1 章総則 第35 (2) (前略) 小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り (後略)」と記載されている。保育者及び小学校教員の意見交換や合同の研究会の内容として、本稿で検証したように入学当初の子どもが取り組む教材を取り上げ、幼児教育施設ではどこまでを目指して保育を展開しているのか、小学校では到達目標を達成するためにどのように工夫するか等、具体的に意見交換及び共有をすることが必要だと考える。本稿では紙面の都合上音楽科の一部の教材のみ取り上げたが、他教科の教材も分析することで、幼保小の円滑な接続や教科間の連携が取れるものと考ええる。

また、本研究の結果から、1 つの教材の活動に他科目と関わりが深い複数の項目の姿が関連していることが明確になったこと、「小学校学

習指導要領第1章総則 第2 教育課程の編成 3 (3) エ」の解説では、「低学年においては、第1章総則第2の4(1)に示すとおり、幼児期の教育との円滑な接続を図る観点からも、合科的・関連的な指導の工夫を進め、指導の効果を一層高めるようにする必要がある(後略)」と示されていることから、教科を合同で実施するもしくは他科目で学んだことを繋げて指導することを提案する。例えば、本研究の結果より、教材「うたってなかよし」は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の(3)、(6)、(9)、(10)が該当することから、「幼児教育部会における審議の取りまとめ²⁶⁾」の資料4より、「音楽」以外の科目であれば、全ての科目、特に「道徳」、「特別活動」、「国語」、「音楽」、「造形」、「体育」の科目で関わりを持ちながら指導することが求められる。その観点で見ると、教材「じゃんけんぽん」は(4)、(8)、(10)が該当することから「国語」、「算数」、「道徳」、「特別活動」、「造形」、「体育」と、教材「さんぽ」は(8)、(9)、(10)が該当することから「国語」、「算数」、「造形」、「体育」の科目に関連した指導ができると考えられる。

現行の「小学校教育要領」では、これまでよりいっそう、各科目で指導が別個に取り上げられるのではなく、指導を関連付けることが明確になった。小学校では各科目の枠組みがあるものの、特に低学年では幼児教育からのつながりを意識し、全科目を俯瞰した目で子どもの発達に合わせた指導を検証していくことが必要であると考えられる。

2) 音楽科導入期の教材と幼児教育との関連

これまで幼児教育と小学校教育の制度的な違いについて、また学習内容のつながりについてまとめてきた。本稿で取り扱ってきた導入期の音楽指導について、これまで分析してきた内容

をもとに、幼児教育と小学校教育のつながりを関係図に示す。

図2は花輪ら(2018)によって、幼児教育の音楽教育の流れを図にしたものである。この図が示すように、幼児期における音楽表現は、歌唱や器楽の表現を通して、またリズムやイメージといったものを、子どもの成長に合わせて表現活動として組み入れている²⁷⁾。子どもたちへのねらいとしては、一緒に歌って楽しむことや、器楽に親しむこと、また、イメージを膨らませたり、音にして楽しむことが挙げられる。本研究では、小学校音楽科の導入期の3つの教材と「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」や保育内容の領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」とのつながりを探っている。これまでの教材とのつながりを図で示したものが図3になる。図3と図2を照らし合わせてみると、幼児教育から小学校音楽教育の導入期における子どもの生活や学びが見えてくるものと思われる。

幼児教育の流れとしては、図2にある目的の中で歌唱表現として一緒に歌って楽しむ、器楽表現(リズム)として、器楽合奏を楽しむ、そしてイメージ奏法として音からイメージを膨らませたり、何かのイメージを音で表すことを楽しむとある。まさに小学校音楽科における導入期では、この3つの教材(うたってなかよし、

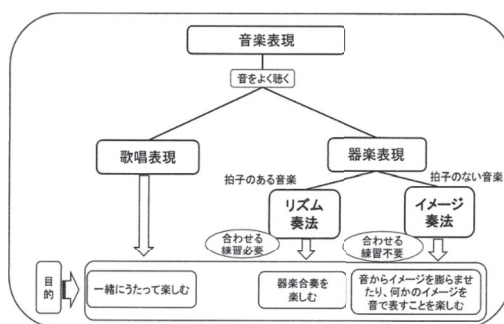


図2 幼児教育の流れ(花輪ら, 2018)

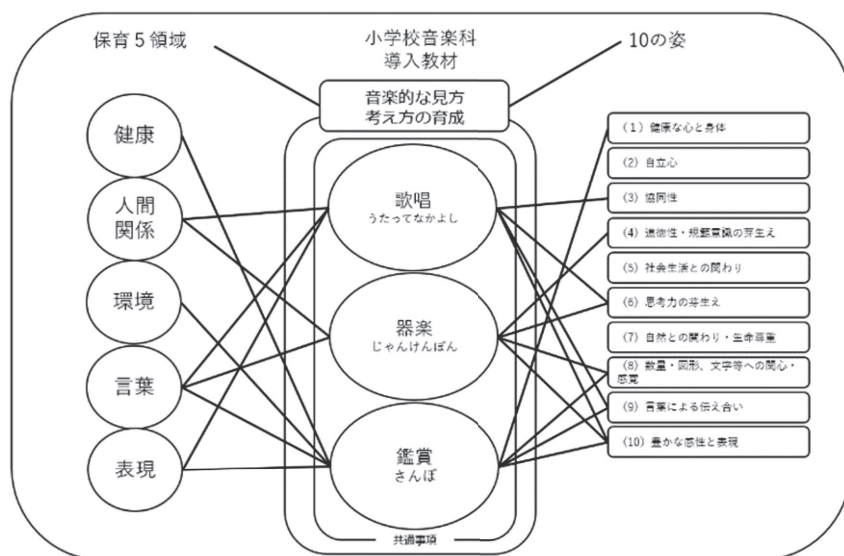


図3 音楽科導入教材と5領域、10の姿との関連

じゃんけんぽん、さんぽ)で幼児教育の目的と同様のねらいをもった教材が設定されていることが明確になった。このことは幼児教育の流れの1つとして、小学校の音楽科の導入期があるということが言えるであろう。保育の5領域においては、すべての領域がバランスよく学びに繋がるように構成されていることが図からも明らかであり、10の姿に関しても、同様に複数の観点が学習とつながるようになっていことが分かる。今回の学習指導要領の改訂の大きなポイントとして「音楽的な見方・考え方」があることは先にも述べた。小塩(2021)は「音楽的な見方・考え方」に唯一の正解はないことや、さまざまな音楽と触れることで未知との出会いをすること、常に聴覚、資格、自分の身体感覚と連動するものが音楽の理解であり、その理解が「音楽的な見方・考え方」に繋がるとしている²⁸⁾。つまり「音楽的な見方」には、音楽を通して「学ぶ」ということもあるが、感受する側の見方や考え方によって、受け取り方も違い、この受け取り方を変容させ、新しい感覚に開かれることこそが、音楽的な見方・考え方なので

ある。今回の分析の結果、すべての領域が学びとどこかでつながっているということは、子どもがそれぞれの得意な領域で、音楽の学びとつながるということになる。自分の得意な感覚と音楽科での学びが繋がることで、まず自分の身体感覚から連動している「音楽的な見方・考え方」を通した理解があり、そして、学びの中で新しい「音楽的な見方・考え方」を身に着け、自分の感受の可能性を広げていくことに繋がるのではないだろうか。なお図からもわかるように(2)自立心や(5)社会性との関わり(7)自然との関わり・生命尊重に関しては導入期では触れられていないが、今回の教材の分析は指導の中心となる内容を分析したため、指導の中心となっていない活動については明言を避けたところに、関連性が見られない原因があるものと思われる。またこれらの学習については、導入期を経て今後の単元で触れることとなっている。

次に図2の幼児教育の音楽関係図の中に「音をよく聞く」ということが表現の第一にあることに注目したい。この「音を聞く」ということ

が指導の土台にあることが、子どもたちにとってもなじみのある音楽活動であることを念頭において、導入期の指導は組み立てていくことが大切ではないだろうか。例えば5領域の表現や環境も子どもの感覚活動としては「音を聞く」ということが含まれる。その活動が乳幼児期は感覚運動器から始まる遊びの中から音との関わりが生まれるため、「音を聞く」ということが生活の一部であることは自明の理ではあるが、学習活動になると残念ながら感覚を使いながら学ぶことは幼児期ほど豊かではない。例えば、歌唱や鑑賞で「音を聞く」とき、その聞き方が違いを知ったり、しくみについて理解するなどの教育的な活動になるのか、それとも感じるということに留め、共有しあう感覚的な活動になるかは、教師の指導によるものと言える。幼児教育からの接続を考えると、感じることに留め、共有しあうという活動が、導入期には特に大切ではないだろうか。幼児教育は生活の中で音を楽しむということを積み重ねていること、それはすなわち五感を使った活動をたくさんしていることと言える。音楽科でも導入期では特に聞いて、触って、感じるという時間を多くとることにより、子どもたちがこれまで経験してきたことが音楽科の学びへとつながることを期待したい。

7. まとめと今後の課題

今回の学習指導要領の改訂で明確だったのは、これまで生活科を中心に国語や図工や音楽、体育といった科目において、保幼小の連携が示されていたのだが、すべての教科で接続が目指されたことである。小学校教育が幼児教育の接続のもとに開始されるということであれば、特にその入り口である1学期の学習内容について、小学校教員の指導法の中で幼児教育の理念

や目指してきたものを10の姿という結果としてみていくだけではなく、子ども理解として繋げていくことが大切であろう。

本研究では、今回の改訂に沿った内容の吟味や学習指導要領との対比、また幼児教育での生活と学びのつながりを扱うことに目的を置き、関係図を提示するにとどまった。また、幼児教育との連続性を考える際に、小学校の音楽科は、教科であり評価は外せない要因のひとつでもある。今後、具体的な指導法や評価との関わり、また現場での運用について深めていくことを課題として本稿を閉じたい。

参考文献

- 1) 今村里佳・山内紀幸 (2020). 小学校低学年の音楽授業に関する考察 -A 小学校の授業構成と指導法に着目して-. 山梨学院短期大学研究紀要, 40, 67-82.
- 2) 文部科学省, 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申) 【概要】 (2016). (中教審第197号).
- 3) 同掲2) 6.
- 4) 文部科学省(2017). 第62号幼稚園教育要領, フレーベル館.
- 5) 厚生労働省(2017). 第117号保育所保育指針, フレーベル館.
- 6) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2017). 第1号, 幼保連携型認定子ども園教育・保育要領, フレーベル館.
- 7) 同掲4) 19. 5) 27. 6) 30.
- 8) 岩佐明子・長井典子・木許隆 (2018). 「幼稚園教育要領」告示にともなう領域「表現」に関わる担当科目の課題. 京都文教短期大学研究紀要, 56, 55-64.
- 9) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説, 47
- 10) 文部科学省幼児教育部会, 幼児教育部会における審議の取りまとめ, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377007_01_4.pdf, 平成28年8月26日, 令和3年3月5日閲覧

- 11) 有本真紀・阪井恵・津田正之 (2019). 教員養成課程 小学校音楽科教育法, 教育芸術社.
 - 12) 文部科学省 (2018). 小学校学習指導要領 (平成 29 年度告示) 解説音楽編, 東洋館出版社.
 - 13) 教育芸術社 (2020). 小学生の音楽 1～6, 教育芸術社.
 - 14) 全国大学音楽教育学会編著. (2013). 明日へ歌い継ぐ日本の子どもの歌-唱歌童謡 140 年の歩み. 音楽之友社.
 - 15) 芹澤美奈子 (2017). カール・オルフの教育理念の幼児教育への適用-2 つの幼稚園での事例を通して-. 鶴見大学紀要. 第 3 部保育・歯科衛生編, 54, 62.
 - 16) 入江真理 (2020). 保育におけるリズム楽器の活用に関する研究-保育の現状とリトミック実践からの検討-. スポーツと人間 静岡産業大学論集, 4(1), 34-35.
 - 17) 矢部朋子 (2011). 幼児の遊びにみられる音楽的表現の共有過程. 保育学研究, 49(2), 168-176.
 - 18) 時得紀子・信谷隼 (2010). 身体表現活動を取り入れた拍感の体得をめざす試み-小学校低学年の音楽科授業を通して. 教育実践研究, 20, 27-36.
 - 19) 青山昌文 (1997). 芸術の古典と現代, 放送大学教育振興会.
 - 20) 斎藤百合子・今村友美・硯阿哉子 (2011). 子どもが楽しむ構成活動 (音楽づくり・創作) の授業 第 2 年次-高学年における「反復・変化」を指導内容とした音楽づくり (生成の原理による授業づくりプロジェクト). 学校音楽教育研究, 15, 93-95.
 - 21) 坪能由紀子・加藤恵利子 (2017). 幼児のつくりうたの音楽的構造分析: A 幼稚園での事例をもとに. 日本女子大学大学院紀要. 家政学研究科・人間生活学研究科, 23, 235-243.
 - 22) 黒石順子・梶川祥世 (2011). 音楽が母親の乳児あやし行動に及ぼす影響について. 子育て研究, 1, 30-39.
 - 23) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議 (第 1 回) (2010). 資料 3, 22.
 - 24) 同掲 23)
 - 25) 細田淳子 (2003). オルフシュールベルクにおけるボディ・パーカッション-保育現場への広がり (特集 ボディ・パーカッションの魅力). 音楽教育実践ジャーナル, 1 (1), 16-27.
 - 26) 同掲 10)
 - 27) 花輪充, 佐藤隆弘, 梁川悦美, 柿沼芳枝, 渡部晃正, 細田 淳子 (2018). 幼稚園教育要領の改訂と教員養成校の課題: 5 領域から考える. 東京家政大学教員養成教育推進室年報, 5 (1), 29-38.
 - 28) 小塩さとみ (2021). 音楽科の「資質・能力」を考える-音楽学の立場から-宮城教育大学教職大学院紀要, 2, 11-20.
 - 29) 梅本堯男 (1999). 「子どもと音楽」東京大学出版会.
- 注 1) 作りうたの定義として, 梅本 (1999) が提唱した
 ①リズム (時間的パターンの構造, 拍感) または旋律 (音高変化のパターン) をもつ, あるいはその両者をもつもの②即興的に作られたもの③自発的につくられたもの (まわりの大人と関わりをもって生まれる場合もあり) としている²⁹⁾.

Abstract

Music Teaching Materials in the Introduction Period of Elementary School Music: From the Viewpoint of Connection between Early Childhood Education and Elementary Education

Akiko IWASA, Utako HORIUCHI

This study discusses musical expression activities in early childhood education in connection with the elementary school music curriculum. Based on the Courses of Study for Kindergartens, Guidelines for Child Care at Day Nurseries, Standards of Education and Care for Centre for Early Childhood Education and Care, and Curriculum Standards for Elementary School, teaching materials of “singing,” “instrument,” and “appreciation” used in the elementary school music department were analyzed from the viewpoint of connection between early childhood education and elementary school. The study focused on materials presumed to be taught, particularly at the start of first-grade and “common matter” content. The results show the concrete connection between the “Five areas of Child Care” and the “Ten postures expected to be developed by the end of early childhood,” and the content of “musical perspectives and ways of thinking” taught in elementary school.

Key words: elementary school music department. connection between early childhood education and elementary education, musical perspectives and ways of thinking

